

2018.05.15

会員の皆様、こんにちは。

このメルマガでは、東京オリンピック・パラリンピックに向けてさまざまな準備がなされていることをご紹介してきました。今回は、「あいサポート運動」がテーマです。東京パラリンピックをいい機会と捉え、障がいに対する心のバリアを取り除こうという運動です。

真のバリアフリーを実現するためには、これまでご紹介した公共交通機関などのハード面の整備に加え、障がいに対する国民一人一人の理解・意識や、助け合いができるソフト面の整備も重要です。是非ご一読ください。

石田まさひろ政策研究会

## 東京パラリンピックの機会に、共生社会のために 実際に効果を出す周知策を考える

### ■ 心にもバリアフリー化を

東京パラリンピックまであと2年となり、「心のバリアフリーを進めよう」という機運が高まっている。「あいサポート運動」という運動を聞いたことがあるだろうか？ 現在 11 道府県と韓国で取り組まれているのだが・・・

### ■ あいサポート運動

12 の障がいについて、①その特性、②障がいのある人が日常生活で困っていること、③ちょっとした配慮や手助けの方法の3つを多くの人に知ってもらう運動なのだ。ここでいう“配慮”や“手助け”は、特別なものではなく「ちょっとした」もので、例えば、「白杖を使っている視覚障がい者は、点字ブロックに自転車を止められると困る」、「知的障害のある人は、言葉や行動の意味が相手に伝わらず誤解や偏見を受けること

がある」といった困り事を知って配慮を促すものだ。知っているかどうかで、障がいのある人への視線や接し方が変わる可能性がある。『知ること』が重要で、まさに“心のバリア”が無くなる。

#### 「あいサポート運動」HP

<http://aisupporter.jp/>

<http://www.pref.tottori.lg.jp/aisupport/>

### ■ 実効性を上げるために

この実効性を上げるためには「関心を持っていない多くの人々に知ってもらうこと」が大事だが、これが行政施策の弱いところ。役所の広報を見る人は多くない・・・。

この運動では、自治会や学校等の地域住民は勿論、「あいサポート企業」といって多くの企業の協力を得ている。(あいサポーター数：410,843 人、あいサポート企業：1,568)



バッジ（左）とパンフレット

それでも、ほとんどの人が知っているようなレベルまで持っていくのは難しい。今回の東京パラリンピックは、関心の少ない人々に理解を広げる絶好の機会だ。そもそも「人」が地域や集団の中でいきいきと生活するためには、自分が多少なりとも「理解されている」ことが必要だ。これは障がいの話に限ったことではないが、障がいのことになると知らない人が多くなる。自分に直接関係ないと思っている知識を『知る』ための手間や、声を掛ける勇気などの心理的ハードルの方が大きく、せっかくの善意があっても、配慮が実施されにくくなる。

## ■ あいサポート運動の目指すところ

この運動の狙いは、こうした住民の理解（想像力）を助けることだ。日常生活や社会生活で支障を来すかどうかは暮らしている社会の包容力によるところも大きく、理解が進めば、障がいをひとくくりせず個性のようにとらえ、一人一人をより尊重する

ことが期待できる。さらに、「お互い苦手なところをいかに助け、得意なところをいかに伸ばすか、その工夫や支援に知恵を出すこと（創造力）」に重点が置かれ、その地域は発展するだろう。個人的な意見だが、地方と都市部では人の心の動きが異なるように思う。地方では街中でも知り合いに会う確率が高く、人を見ながら歩く。一方、都市部、特に東京では人が多すぎて、匿名性が高くなり見て見ぬふりをするが多くなる（小生も偉そうなことは言えないのだが・・・）。この難しい東京でパラリンピックが開かれる機会に『知る』人が増えることを願っている。

東京パラリンピックのレガシーが、「共生社会」になり、日本が「誰もが暮らしやすい社会」で世界をリードしたらそれは大変素晴らしいことだ。



啓発イベントでのゆるキャラ「とりピー」  
（著者が中に入ってます）

著者：T.K.